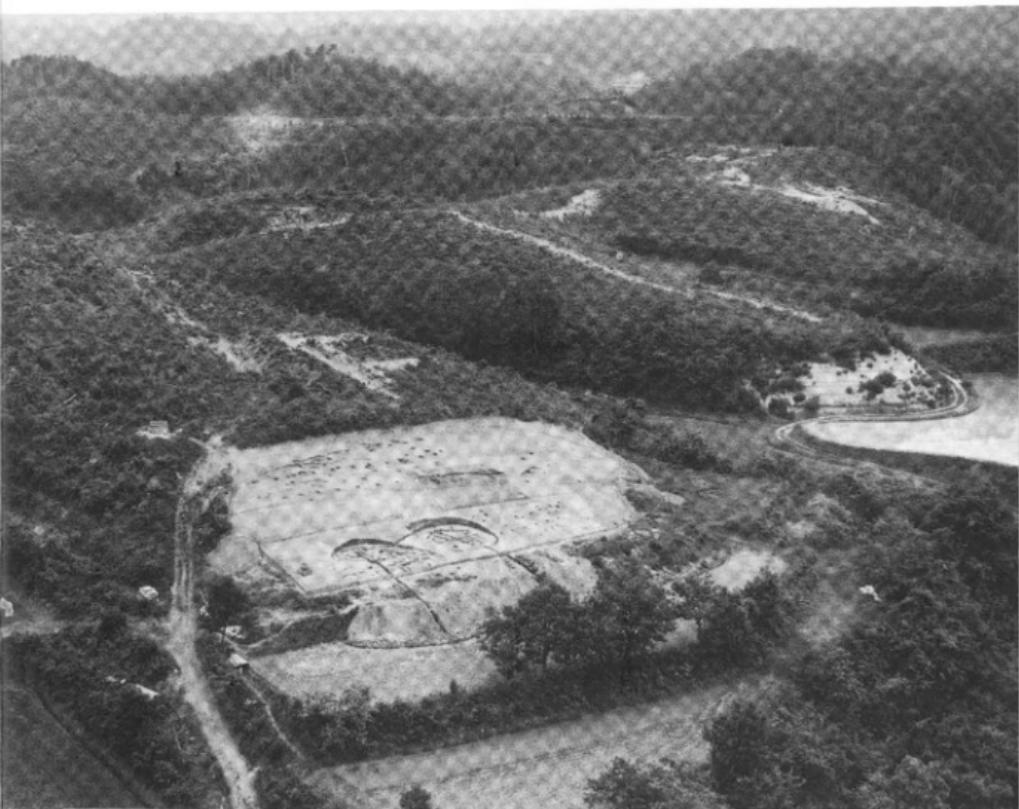


津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第29集

向林遺跡・中鎌田墳墓



向林遺跡空中写真

1989

津山市教育委員会

大綱農地造成埋蔵文化財発掘調査委員会

序

津山は、和銅6年（西暦713年）に備前国から6郡を割いて美作国が誕生して以来、常にその政治・経済の中心として現在にいたっています。古代にあっては美作国の政治経済の中核である美作国府が設置され、近世においては津山城を中心とした城下町が癡達をみせます。いまも市内のそこには城下町の景観が残り、訪れるひとに歴史の香りを感じさせてくれます。

古代から現代に連なる津山のそうした歴史的位置は、「吉備」に属するといわれながらも中国地方山間部にあって一定の独自性をみせた、美作国の誕生をはるかにさかのほる弥生時代にその歴史的始まりがあったといつても過言ではありません。

ここに報告する市内大篠地区の遺跡群もまた、そうした津山の初期の開拓者たちの残した遺跡を主体とするものです。発掘された集落跡に残された弥生時代終末期の土器や住居には、従来からいわれてきたように岡山県南部地域よりも、むしろ山陰地域と似かよった特色が認められました。発掘調査の記録としては満足すべきものではありませんが、本書がいささかなりとも当該期の研究に役立てば幸いです。

最後になりますが、調査に際してよせられました、土地所有者ならびに関係者各位の御協力に対し、深甚の敬意を表するとともに、地域の歴史を掘りおこす際の資料として本書が活用いただけるよう希望いたします。

平成元年7月

大篠農地造成文化財発掘調査委員会
委員長 福島 卓一

例　　言

1. 本書は、岡山県津山市大瀬に所在する向林遺跡および中鎌田墳墓の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、津山市産業部が計画した農地造成にさきだつ事前調査である。昭和59年に津山市教育委員会が確認調査を実施し、その結果を受けた本調査を大瀬農地造成文化財発掘調査委員会が昭和60年に行なった。
3. 採図中の方位は磁北である。また、レベル高は海拔高を示す。
4. 本書第1図「位置図」は、建設省国上地理院発行2万5千分の1地形図（津山東部）を複製したものである。
5. 本書で用いた遺構の略号については次の通りである。
SH：住居、SB：掘立柱建物
6. 本書の執筆と編集は安川豊史があたり、遺物修理に日笠月子の協力を得た。
7. 向林遺跡の製炭窯について、富山大学広岡公夫、山本恭子両氏に考古磁気年代の測定をお願いし、その結果について原稿をいただいた。
8. 調査にあたっては、土地所有者をはじめとする地元関係者の方々の協力を得た。記して感謝する。
9. 出土遺物、写真および図面類は津山市二宮埋蔵文化財整理事務所に保管してある。

向林遺跡・中鎌田墳墓群

目 次

序

I	調査経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	位置と環境	2
II	調査の概要	4
1	向林遺跡	4
2	中鎌田墳墓	22
3	向林遺跡製炭窯の考古地磁気測定	25
III	まとめ	30

挿図・表目次

Fig. 1	位置図	3	Fig. 14	製炭窯実測図	15
Fig. 2	調査区域図	3	Fig. 15	SB 01・02・09 実測図	16
Fig. 3	向林遺跡地形図	4	Fig. 16	土器実測図 1	18
Fig. 4	向林遺跡全体図	5	Fig. 17	土器実測図 2	19
Fig. 5	SH 01・03 実測図	6	Fig. 18	石製品・鉄製品実測図	20
Fig. 6	SH 02 実測図	7	Fig. 19	土器実測図 3	21
Fig. 7	SH 04 実測図	8	Fig. 20	中鎌田墳墓地形図	22
Fig. 8	SH 05 実測図	9	Fig. 21	中鎌田墳墓全体図	23
Fig. 9	SH 06a・09 実測図	10	Fig. 22	遺構実測図	24
Fig. 10	SH 10・11 実測図	11	Fig. 23	土器実測図	24
Fig. 11	SH 12 実測図	11	Fig. 24	向林遺跡製炭窯の考古 磁気測定結果と西南日 本の地磁気永年変化	29
Fig. 12	SB 07・08 実測図	12			
Fig. 13	SB 03・06 実測図	13			

Tab. 1	向林遺跡製炭窯の磁気測定結果	29
Tab. 2	向林遺跡製炭窯の考古地磁気測定結果	29



I 調査経過

1 発掘調査に至る経過

津山市大篠地区は古くからの田園地帯である。昭和59年に津山市は酪農経営の促進と安定化をはかるため、農地造成工事を計画した。これは、対象となる丘陵を造成して約5.5haの創削畑を造成しようとするものだが、当該地域の詳細な分布調査が未了であったせいもあり、当初の段階では計画地内に埋蔵文化財の存在は知られていなかった。津市教育委員会が分布調査を実施したところ、中鎌田地区に古墳の可能性があるわずかな高まりを発見したほか、その他の地区においても、地形等からみて集落遺跡の存在する可能性が認められた。

昭和59年10月、津市教育委員会は、工事担当部局である津山市産業部農政産業課および構造改善課からの依頼を受け、計画地内における埋蔵文化財存在の有無および広がり等の確認を目的とした試掘調査を実施。試掘調査はバックホーと一筋手掘りで、計画地全体を対象とした(Fig. 2)。その結果、当初予想された中鎌田地区の古墳状の高まりは、火葬墓であることが判明したほか、向林地区において製炭窯1基が検出された。

確認調査結果を受け、津市教育委員会では工事担当部局と発見された遺跡の保存協議にはいったが、遺跡の位置する地区は工事計画上どうしても削平する必要のあることが判明した。このため、事前に全面調査を実施することとし、調査実施については大篠農地造成文化財発掘調査委員会がこれを行なうこととなった。委員会および調査にあたった組織は次の通りである。

大篠農地造成文化財発掘調査委員会

委員長 福島 祐一(津市教育委員会教育長)

副委員長 藤田 公男(津市教育委員会教育次長)

委員 内田 康雄(津市教育委員会参事)

　　✿ 穂山三千徳(津市教育委員会社会教育課文化係長)

　　✿ 潛 哲夫(津市教育委員会社会教育課主事)

監事 富沢 昭二(津市教育委員会専務課長)

　　✿ 河村 孝三(津山市産業部構造改善課長)

事務局長 内田 康雄

事務局次長 穂山三千徳

事務局員 安川 豊史(津市教育委員会社会教育課主事)、岸川百合子(団体職員)

調査同長 内田 康雄

調査員 中山 俊紀(津市教育委員会社会教育課主事)

　　✿ 安川 豊史

2 位置と環境

津山盆地の北方には、中国山地を形成する標高700m内外の山々が連なる。これらの山々の南山麓には断層帯が東西に走り、そこから南方にむかって丘陵群が発達している。丘陵は、概して開析が進行しており、樹枝状を呈するものも少なくない。こうした丘陵上には弥生時代集落が形成されることが多く、本遺跡群もまた同様の立地を示す（Fig.1・2）。

向林遺跡は、弥生時代後期の集落跡を主体とする複合遺跡で、津山市街地の北東約5.5kmの地点、東に張り出した丘陵中程の緩斜面に位置し、行政区画は岡山県津山市大篠1463番地に属する。遺跡は畑地に造成されていたが、旧地形を良くとどめている。遺跡は、もともと丘陵尖端部まで及んでいたと考えられるが、確認調査の結果、過去の水田造成の際にその東半部を大きく破壊されたものと判断された。平地との比高差20m、海拔175m。遺跡の眼前には蟹子川が流れ、丘陵に挟まれたややひらけた平地を形成する。蟹子川は南下し、やがて吉井川の一支流である加茂川に注ぐ。

中鎌田墳墓は、向林から西に丘陵を越えた反対側、南西に突出した独立丘の頂上近くに単独で存在する。平地との比高差20m、海拔185mをはかる。行政区画は津山市大篠394番地の2および395番地の3に属する。

周辺では、弥生時代においては、向林遺跡の東側の平地、大篠国廣地区において昭和51年に構造改善事業が実施された際、須恵器とともに弥生土器片や石斧などが発見されている。その東方500m程の低丘陵上には後期の土器を出土した采井遺跡が知られている。向林遺跡の南方1.7kmの丘陵上には、弥生中期の集落跡を主体とするビシャコ谷遺跡（行田、1984）が存在した。古墳時代については、向林遺跡北方の樋内池南方で出土した1面の銀鏡文鏡（津山市教育委員会、1983）が伝えられるほか、大篠地内では大月古墳、伊垣古墳の2基の古墳が知られている。これらは現存しないが、いずれも小円墳であったとみられ、どちらからも過去に陶棺が出土している（註）。

註 前原策馬氏の教示による。

引用文献

- 行田裕美（1984）ビシャコ谷遺跡、津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集、津山市教育委員会
津山市教育委員会（1983）津山の文化財、P.4、津山市教育委員会



Fig. 1 位置図 比尺1:25,000

- 1 向林遺跡
- 2 中鎌田墳墓
- 3 乗井遺跡
- 4 ビシャコ谷遺跡
- 5 鋸齒文鏡出土地
- 6 大月古墳
- 7 伊垣古墳



Fig. 2 調査区域図 比尺1:3,750

II 調査の概要

発掘調査は、昭和60年1月21日から同年3月30日までの予定で開始した。バックホーを用いて向林遺跡の耕作土除去を行なったところ、知られていた製炭窯址以外に弥生時代集落跡が広範囲に広がることを確認した。このため調査期間を2ヶ月延長し、昭和60年5月31日に全ての調査を終了した。調査面積1,100m²。向林遺跡の調査と並行して中鎌田墳墓の調査を実施した。当初、古墳の可能性が考えられたが、調査の結果、火葬墓であることが判明した。調査面積25m²。

1 向林遺跡

弥生時代集落址、古墳時代製炭窯址1基、近世建物址1棟からなる複合遺跡である。調査区域は、畑に開墾されていた南北45m、東西25mの範囲で、南北両側は当時の地形をほぼそのまま残している。また、西側の丘陵上方については、試掘調査の段階で遺構が存在しないことを



Fig. 3 向林遺跡位置図

縮尺1:1,000

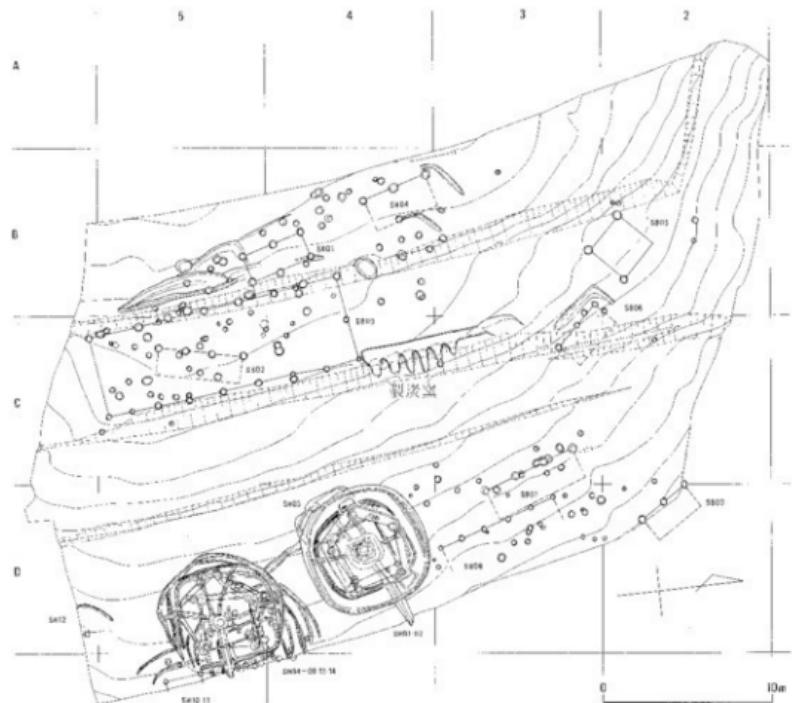


Fig. 4 向井遺跡全体図

確認したので、調査区の南北及び西側はほぼそのまま遺跡の範囲を示している。いっぽう、調査区の東側は過去の水田造成の際に大きく削り取られていて、検出した住居址の一部がこの削半を受けている。したがって、現状では本来の遺跡の広がりを確認することができないが周辺の地形からみて、およそ南北4.5m、東西5.0mほどの規模ではなかったかと推定される。

弥生時代に属する遺構としては、住居址15棟 (SH 01-14)、建物址8棟 (SB 01-08) がある。そのほかにも建物にまとまらない柱穴群がかなり存在するので、建物址については検出された遺構数を上回っていたものと考えられる。調査区内からは小量の弥生中期後半の土器片が出土したが、遺構から出土した土器には中期ではなく、ほとんどすべてが後期で、古墳時代にかかるものが一部存在する。住居群は、調査区の南西部に集中する。いっぽう建物群は住居周辺に広範囲に存在するが、住居と重なりあうことはない。両者の立地には明確な区別が認められる。以下、遺構、遺物の順に概要を述べる。住居址については、重複しつつもいくつかの住居

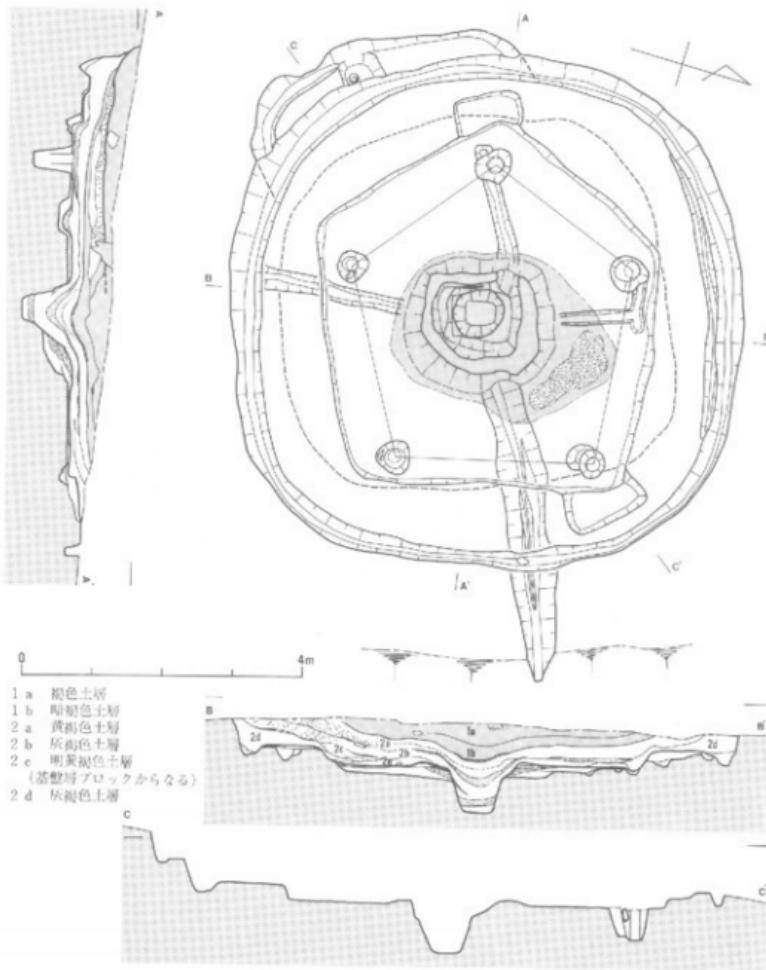


Fig. 5 SH01-03実測図

縮尺 1 : 80

群に分けることが可能で、群別に説明を行なう。

SH 01・03 (Fig. 5) SH 03 は SH 01 の埋積後に建てられた住居址で、南西側の壁体部と床面の一部を検出したにすぎない。1 道 4 m の隅丸方形とおもわれる。

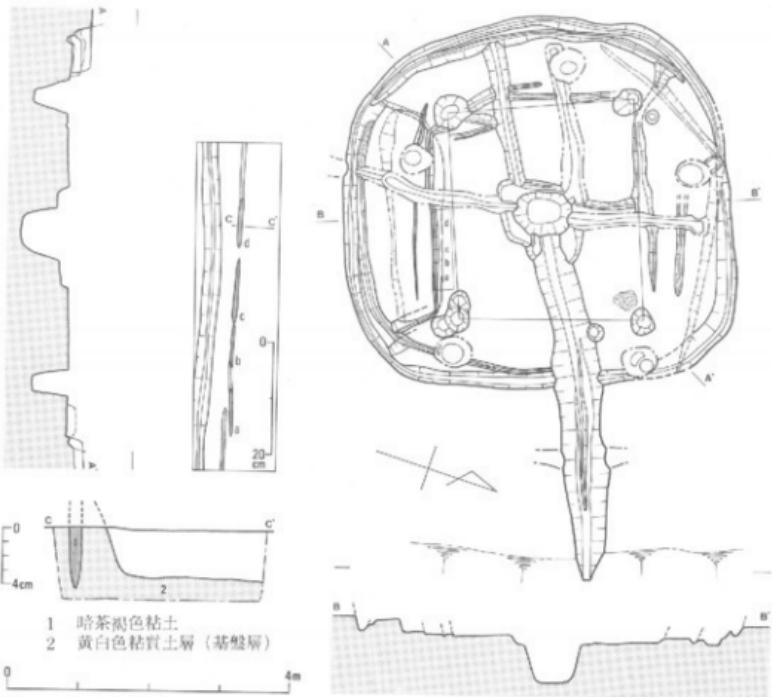


Fig. 6 SH02実測図

縮尺 1 : 80

南西壁面近くに浅い方形ピットをもち、そのなかから高环脚台部が出土した。床面中央部には薄い炭灰層の広がりが認められたものの、中央穴や柱穴については検出できなかった。これらについて、本来、ともなわなかった可能性も考えられる。

SH 0 1 は直径7.3mの円形住居址で、次に述べるSH 0 2を建て替えたものである。1回の補修が認められ、北側の壁体溝および5本の柱にその痕跡が存在する。柱の外側には柱間にそってベッド状遺構が一周する。ベッド状遺構は、中央床面から平均20cmの高さで、北西と西側の2本の柱の背後に浅い方形のくぼみがみられる。床面中央には、長径80cm、深さ7.5cmをはかる中央穴がある。中央穴内の下層には厚さ10cmの灰層が存在した。住居址内に堆積した土層断面からは、住居址内に土砂が堆積しながら中央穴内の灰層が次第に圧縮されていった様子がうかがえる。中央穴は2段に掘りくぼめられ、上部の平面形は方形を呈する。中央穴の周囲には、盛土を施し堅く叩きしめて形成された堤が巡る。中央穴の北東側には1面の焼土面がみられ、中央穴を含めた広範囲に炭層の広がりがみられる。中央穴には3本の床溝が付属し、1本の排水溝が住居址の外に抜けている。排水溝は、住居の西方にかなり延びていたと考えら

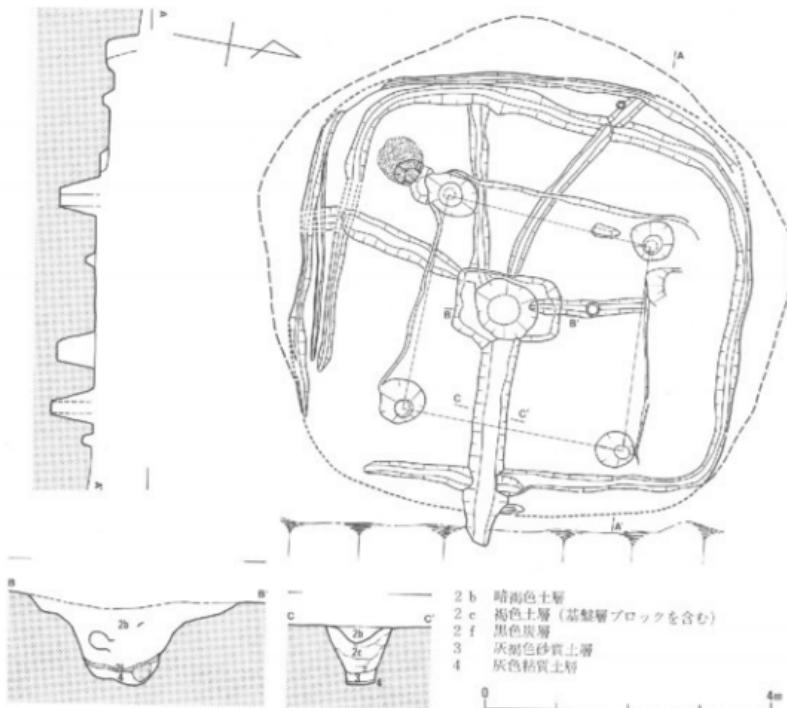


Fig. 7 SH04実測図

縮尺 1 : 80

れるが、水田の造成によって破壊されている。いずれの溝も住居使用時には暗渠として埋められていて、床面は広く利用できる状態にあったことが判明した。保存状態の特に良好な南側例では溝底に木質が残存していた。その形状は不明だが、おそらく樋としての用途を示すものであろう。

SH 0 2 (Fig. 6) SH 0 1 に先行する 1 辺 5.5m の隅丸方形住居址。中央穴と排水溝は SH 0 1 と共有する。4 本柱で東を除く 3 方にベッド状遺構をもつ。2 ~ 3 回の補修が施され、一部の柱のほかにベッド状遺構も作り替えられている。

本住居址で特筆すべきことは、南側のベッド状遺構の端に矢板の打ち込まれた痕跡が確認されたことである。矢板痕跡は、厚さ 1 cm 前後で、幅は 8 ~ 12 cm とまちまちである。一部、重複しながら 1 列に打ち込まれている。ベッド状遺構の土留め用であろう。北側柱穴付近には 1 面の焼土面をもつ。

SH 0 4 (Fig. 7) 4 本柱の長辺 6.3 m、短辺 5.8 m の隅丸方形住居址で、SH 0 5 の上に建

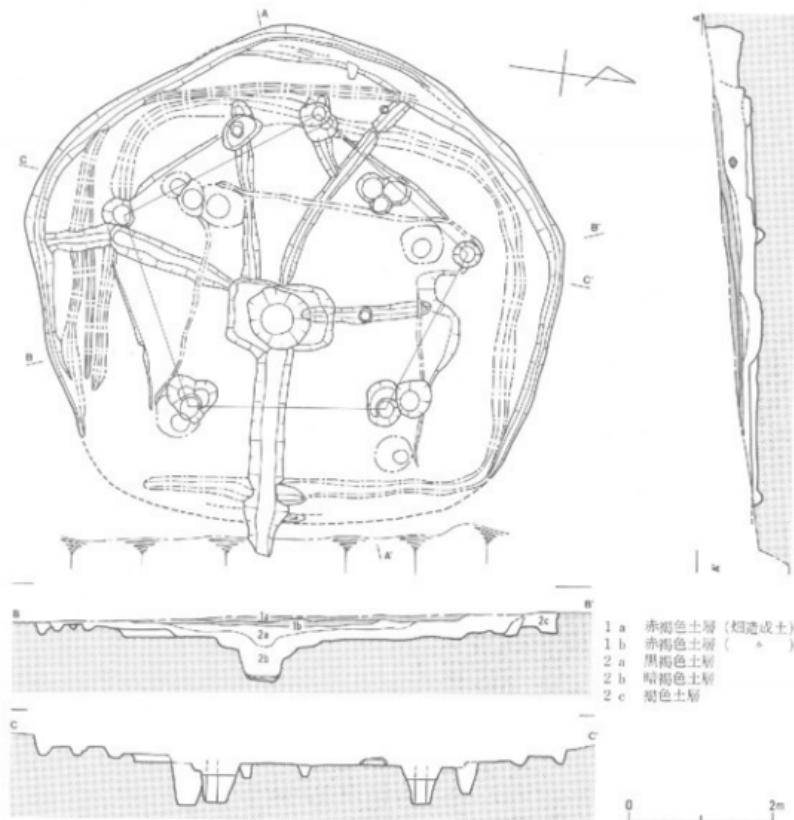


Fig. 8 SH05実測図

縮尺 1 : 80

て替えられたものである。SH 0 5と中央穴を共有するために、中央穴の位置は、ややかたよりも左にみせる。中央穴は2段に掘り込まれ、4本の床溝が取り付く。中央穴底面近くには薄い灰層が認められた。埋土中から小形の壺形土器が出土した。東側を除く3方にベッド状遺構をもつ。住居南西隅のベッド状遺構上面に直径60cmの焼土面が存在する。住居は2回の補修が行なわれ、壁体溝と一部の柱穴に痕跡が認められる。SH 0 1と0 2との関係にみられるように、住居の建て替えは規模の拡大をともなうことが多いが、SH 0 5から0 4への建て替えは逆に縮小した例である。

SH 0 5 (Fig. 8) 5角形の平面形をもつ5本柱の住居址で、2回の補修の痕跡を残す。最大径は7.5mをはかる。SH 0 4により一部破壊され、遺存状態はあまり良好ではない。柱間方

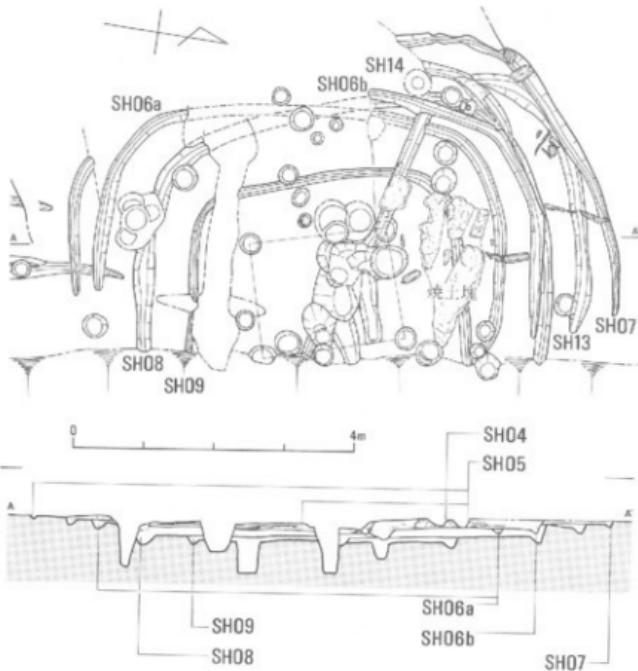


Fig. 9 SH06a-09-13-14実測図

縮尺 1 : 80

向と平行したベッド状遺構がすくなくとも4方に存在するが、西側の状況についてはあきらかでない。SH04と共に4本の床溝のうち、南側のものは南壁体溝からベッド状遺構の下を延び、柱に接して折れ曲がって一段深くなる。また、北西の溝では、西側の柱から延びた床溝が付設されている。これらのことから床溝の機能は、壁体や柱をつたって侵入した雨水などの排水にあったと考えられる。

SH06a-09・13・14 (Fig. 9) SH04・05の下層に順次建て替えられた7軒の住居址群を検出した。中央部がSH04・05によって破壊されていたため、これらのなかには建て替えによるものほかに拡張による住居も含まれている可能性がある。いずれも、西側を水田造成によって破壊されている。

SH09はこれらのうちで最古のもので、直径4m程の隅丸方形住居址である。4本柱で、床面中央部に中央穴をもつ。

SH08はSH09に続く直径5.8mの隅丸方形住居址で、柱数などについては不明である。

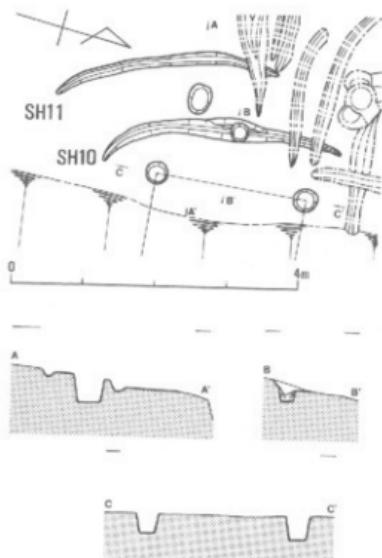


Fig. 10 SH10-11実測図

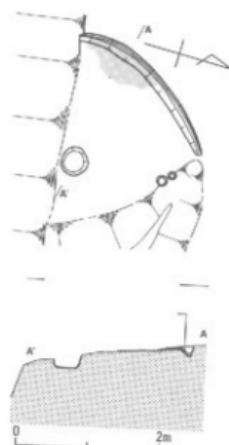


Fig. 11 SH12実測図

SH 0 6 a は SH 0 8 に後続する直径5.7mの隅丸方形住居址で、柱数などについては不明である。

SH 0 6 b は SH 0 6 a に後続する住居址で、北側の壁体溝と床面の一部を残しているにすぎない。火災を受け、炭化材の一部とその際に落下したとみられる焼土塊が床面に堆積している。中央穴に接続する床溝が認められる。

SH 0 7 は SH 0 8 に後続し、SH 0 6 b に先行する住居址で、北側の一部を残しているにすぎない。火災を受け、炭化材が遺存している。平面形は円形であったとおもわれる。

SH 1 3 は SH 0 7 に先行するもので、やはり北側の一部を残すのみである。

SH 1 4 は北西のはんの一部を残すだけで、他の住居址との相対的な関係は不明である。おそらく、SH 0 7 に先行するものではないかとおもわれる。火災を受けており、壁面が焼けている。本住居址にともなって弥生後期前葉に属する高环形土器等 (Fig. 17, 38-40) が出土した。

SH 1 0・1 1 (Fig. 10) 上記住居群に一部を切られながらも、位置を異にしている。いずれも遺存状態が悪く、西側の一部を残しているにすぎない。

SH 1 0 は4本柱の隅丸方形と考えられるもので、SH 6 a に切られている。現状では2本の柱穴を残す。

SH 1 1 は SH 1 0 を拡張したものとわれ、やはり SH 0 4・0 5 に切られている。

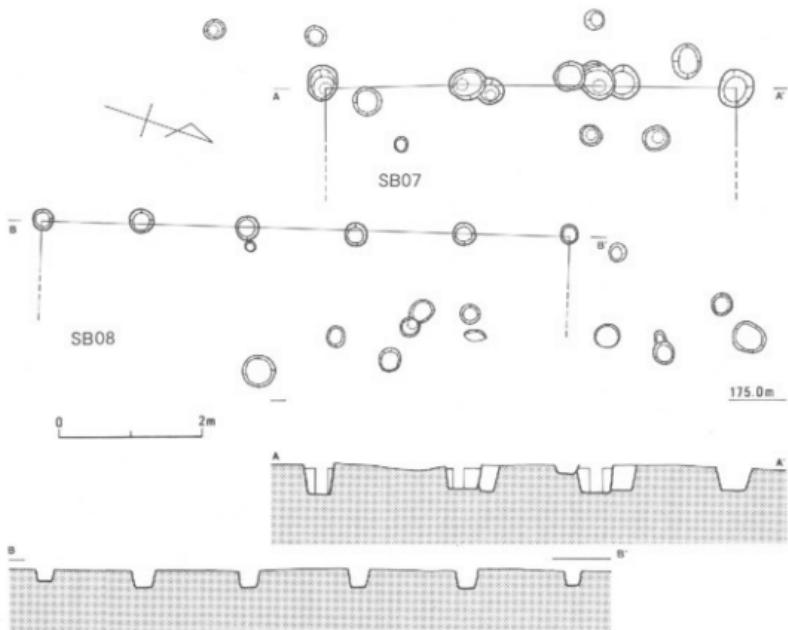


Fig. 12 SB07-08実測図

縮尺1:80

SH 1 2 (Fig.11) 調査区の南東端に位置する。水田および畑地造成により一部を残すにすぎない。火災を受けており、床面と壁体の一部が焼けている。1本の柱穴を検出した。住居の西側下方は侵食谷によって破壊されている。

SB 0 7・0 8 (Fig.12) SH 0 1 の北方に位置する。いずれも斜面上方の柱列を検出したにすぎない。SB 0 7 は桁行2間(5.8m)の建物址で、梁行は1間と推定される。柱穴列の中央に位置する2穴から変形土器(Fig.17,46-47)がそれぞれ出土した。一部の柱穴には補修が認められる。

SB 0 8 は SB 0 7 の下方に位置し、それに平行する建物址で、桁行5間(7.4m)。SB 0 7 とは併存できず、両者は建て替えの関係にあると推定されるが、新旧について不明である。

SB 0 1 (Fig.15) 調査区西方に位置する。桁行2間(3.7m)、梁行1間(1.6m)の南北棟で、建物西方には造成の痕跡が段状の遺構として残っている。SB 0 1 の北には同形同大の建物址(SB 0 4)が存在する(Fig.13)。SB 0 4 の北西上方には溝がめぐっていて、段状遺構は、この溝と一体のものであったと考えられる。したがって、本建物は SB 0 4 と併存した可能性もある。

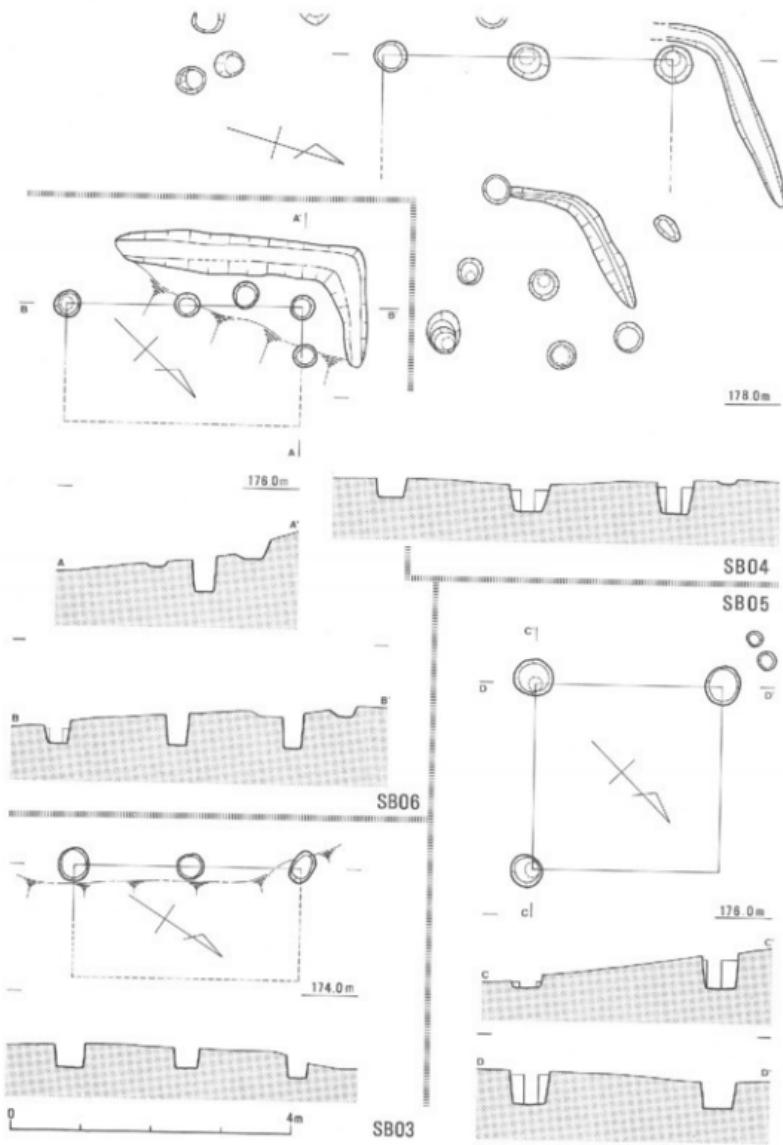


Fig. 13 SB03-06实测图

缩尺 1 : 80

SB 0 2 (Fig.15) SB 0 1 の南東に位置する。斜面上方の柱列が残存するだけである。本遺跡のすべての建物が桁行を地形等高線に平行させていることから、本例も同様に桁行 3 間 (5.1m)、梁行 1 間の南北棟と考えられる。

SB 0 3 (Fig.13) 調査区の北東端で斜面上方の柱穴列を検出した。この柱穴列の北西端については確認できていない。したがって、全体の規模等については不明だが、地形からみて桁行 2 間、梁行 1 間と推定される。

SB 0 4 (Fig.13) 桁行 1 間 (4.1m) の南北棟。斜面上方の柱穴列だけを残す。

SB 0 5 (Fig.13) 調査区の北方に位置する。その北側は急斜面となっており、SB 0 3 とあわせて弥生時代集落の北端を画するものとなっている。北側の 1 穴を消失するが、柱間 1 間の方形プランをもつ。

SB 0 6 (Fig.13) SB 0 5 の南東に隣接する建物で、南西側の柱列を残すのみであとは流失している。桁行 2 間 (3.4m)。斜面上方には、幅 50cm の溝が建物の周囲をめぐっている。この溝の中からは弥生土器のほかに、鉄器 (Fig.18, 5) が出土した。

製炭窯 (Fig.14) 横口付の製炭窯で、調査区の中央に単独で位置する。空体主軸を等高線にほぼ平行させるが、焚口側を斜面下方にやや下らして、傾斜をもたせている。焚口から焼成部奥までの傾斜角は 4.3° をはかる。窯地の造成にともない大きく削平を受けしており、わずかに焼成部と横口の底面近くそして前庭作業面を残しているにすぎない。窯地造成の際、ちょうど窯の段となる箇所に位置したため、からうじて全面的な破壊をまぬがれたものである。この種の製炭窯に通常みられる斜面上方の溝、横口に続く側庭作業面あるいは爐道などは削平を受けたものとみられ、残存しない。

焼成部長は 7.1m、焚口から第 1 横口の始まりまでの 1.4m の間の焼成部幅は 50cm、そこから奥はやや広がり 60cm をはかる。焼成部壁面は、遺存状態の良好な箇所で高さ 15cm を残すにすぎない。壁面のたちあがりについても、焚口から 1.4m までは内溝しながら外方にたちあがるのに対し、そこから奥はは垂直にたちあがる。造構検出面での観察によれば、焼成部の壁面は表面から 3 cm 程は明黄灰色に堅く焼けていて、そこからさらに 13cm 程は暗赤褐色を呈する。底面は灰色でやや還元状態を示すが、堅く焼けてしまっている。焼成部内には天井を形成していたとみられる焼土塊が底面に堆積していたが、劣化が進んでいてとの形状を知ることはできない。

焼成部の東側には 6 孔の横口をもつ。幅は 40~60cm をはかる。横口はいざれも天井部を残さない。横口の底面は焼成部底面よりも低くつくられ、外方に向かって緩やかな傾斜で下がる。底面外方には粉状となった木炭が堆積していた。

焚口からは角礫が重なって検出された。ほとんどの礫はくずれ落ちた状況であったが、壁面

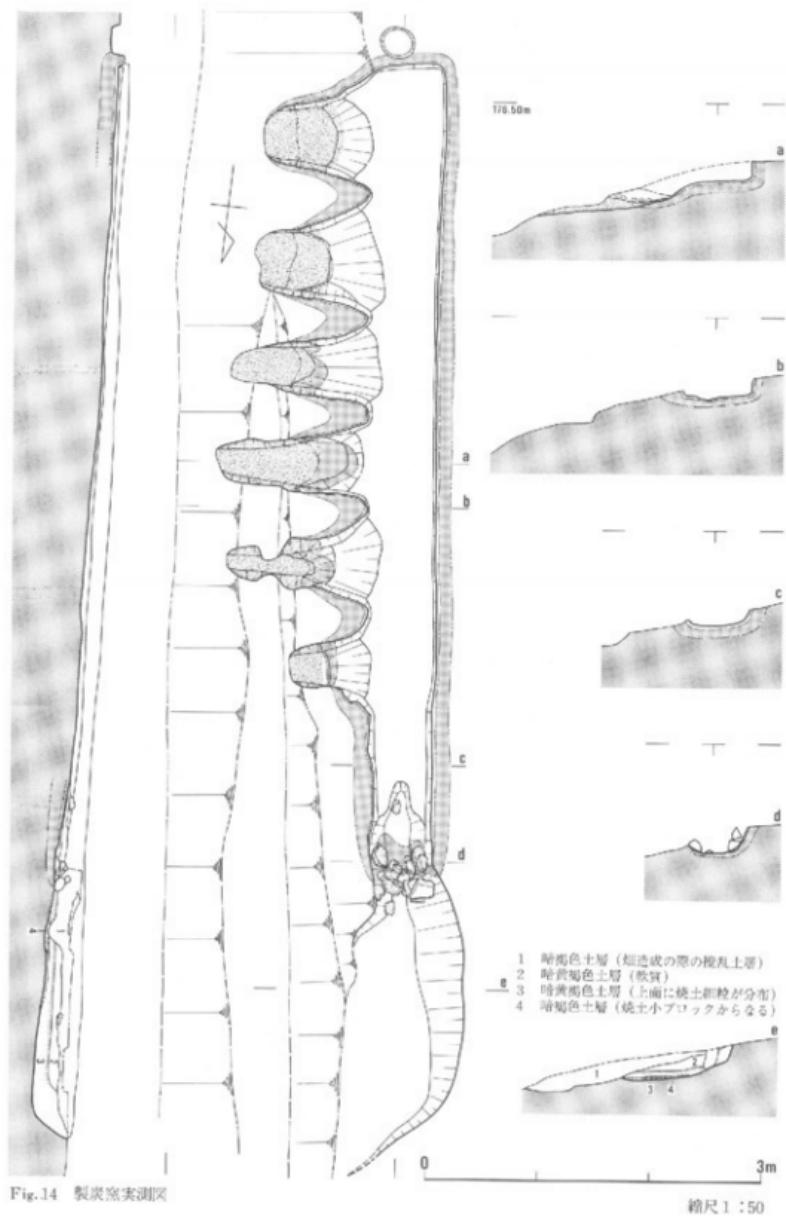


Fig.14 製炭窯実測図

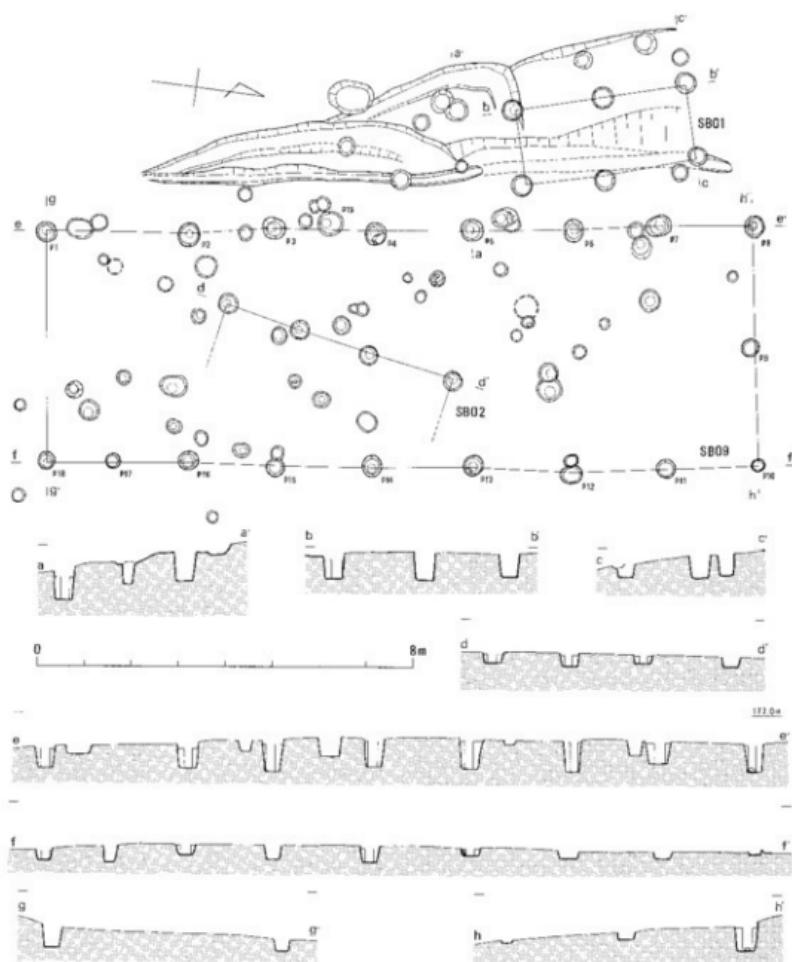


Fig. 15 SB01-02-09実測図

縮尺 1:120

近くには焚口を構築した状態を一部残している。焼成部の焚口近くの底面は1段深く掘られている。

焚口の北側には斜面上方を削り込んでつくった長さ2.5m、幅0.8m程の前庭作業面がある。東側が削平を受けているので、幅についてはさらに広がっていたものと考えられる。前庭作業面には2枚の焼土層の堆積が認められた。焼成部から焼土をかきだしたか、あるいは自然に流出

したものであろう。いずれにせよ、この堆積は製炭窯の操業に対応したものとみられ、少なくとも2回以上の操業が考えられる。遺構からは、土器などの人工遺物は出土しなかったが、考古磁気年代測定結果によれば、本製炭窯の時期は7世紀中葉と推定される。

SB 0 9 (Fig.15) 調査区の南西部に単独で位置する桁行8間(15.2m)、梁行2間(5.1m)の南北棟である。東側柱列はP10からP18までの9本の柱穴がそろっているが、西側柱列では精査したにもかかわらずP1-P2間に柱穴が存在せず、この箇所は2間分の柱間隔をもつ。また、南側の妻柱穴を欠くが、北側の妻柱穴が他の柱穴よりも浅く穿たれていることからみて、流失したものと思われる。西側柱列の外方には、1mはなれて幅30cm程の溝が建物と平行して延びている。柱間は桁行方向では1.4mから2.2mとばらつきがある。東柱とみられるものは検出されていない。

いくつかの柱穴から上器片が出土した。P5からは備前焼揃鉢(Fig.19,50)、P6からは勝間田焼壺、P17からは上師器皿と唐津焼碗が出土した。これらからみて建物の時期は17世紀初頭頃と考えられる。

土 器 (Fig.16-17-19) 上記の遺構からは整理箱で10箱程度の土器が出土した。本遺跡では実測可能なものについては、できるかぎり実測図を掲載する方針で整理をすすめた。以下、出土遺構別に概要を説明する。

SH 0 1 墳七土から出土した土器 (Fig.16,1-16) には、弥生後期前葉(1-2)から古墳時代初頭(4-11-13)に属すると思われるものまでを含む。後者は、SH 0 1 墳土中に築かれたSH 0 3 に由来するものと考えられる。1-2は壺形土器、口縁部を肥厚させたもので内面をヘラ削りする。4は壺形土器で、外方に立ち上がった口縁部はやや外湾する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部表面に竹管を用いた列点文を施す。5-7・8は鉢形土器である。5は手づくねに近いもので、口縁部内面を斜めに断ち切った形態をもつ。8の内面には赤色顔料を塗布する。9-10は脚台部で、10は低脚の高壺形土器と思われる。11-13は椀形土器だが、調査等は不明。器台形土器(14-16)にはA、Bの2類がある。器台形上器A(14)は、段をもって短く立ち上がる口縁部をもち、細く絞った胴部から段をもたずに脚台部の広がる形態のものである。同B(15-16)は鼓形器台で、15では段の稜線は丸みをおびている。

SH 0 1 床面出土土器 (Fig.16,18-31) には壺形土器(18-19)、高壺形土器(20-31)、鉢形上器(23-26)、器台形土器(21-22)がある。壺形土器のうち、18はやや外湾しながら立ち上がる二重口縁をもち、胴上部にヘラ描きの列点文をめぐらす。胴部内面は丁寧にヘラ削りした後、頸部付近をヘラ磨きする。外面上には炭化物が付着している。高壺形上器20の壺部は段をもたずに浅く広がり、内外面に赤色顔料を塗布する。鉢形土器の小形のものは、口縁内面を斜めに切る特徴をもつ。底部(27-30)のうち27は叩き成形で、30とともに壺形上器の可能性もある。

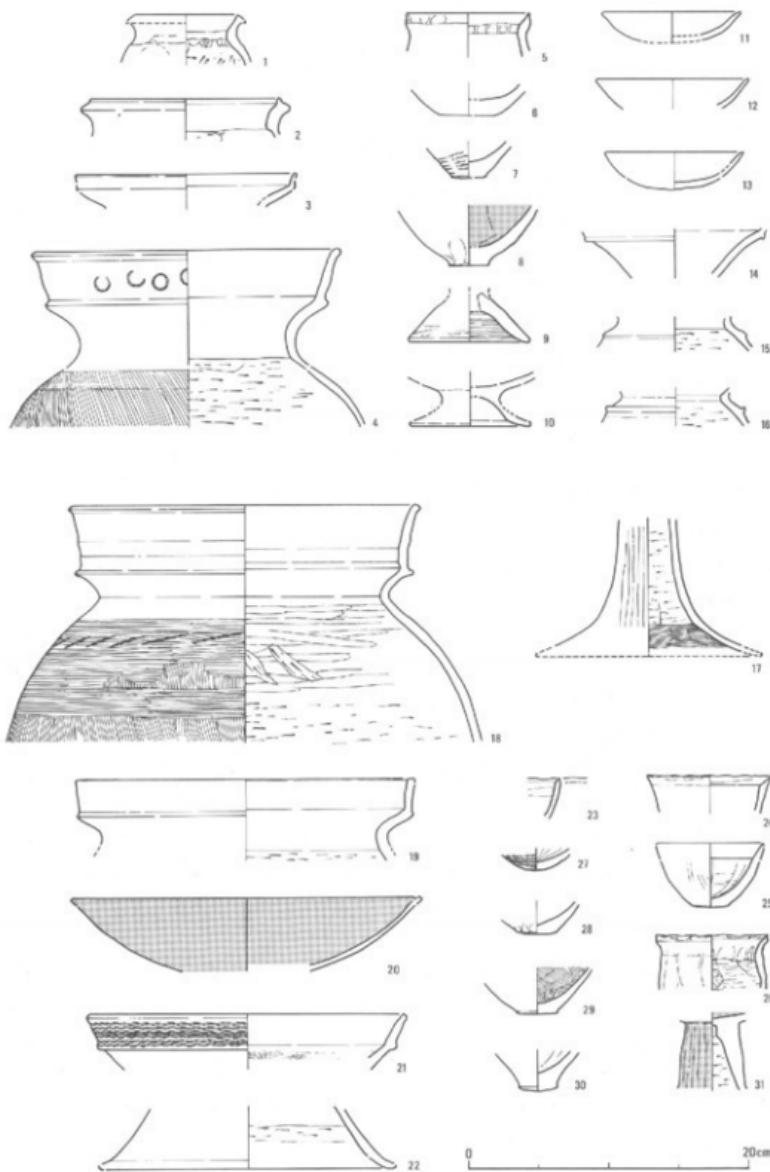


Fig. 16 土器実測図 1

縮尺 1 : 4

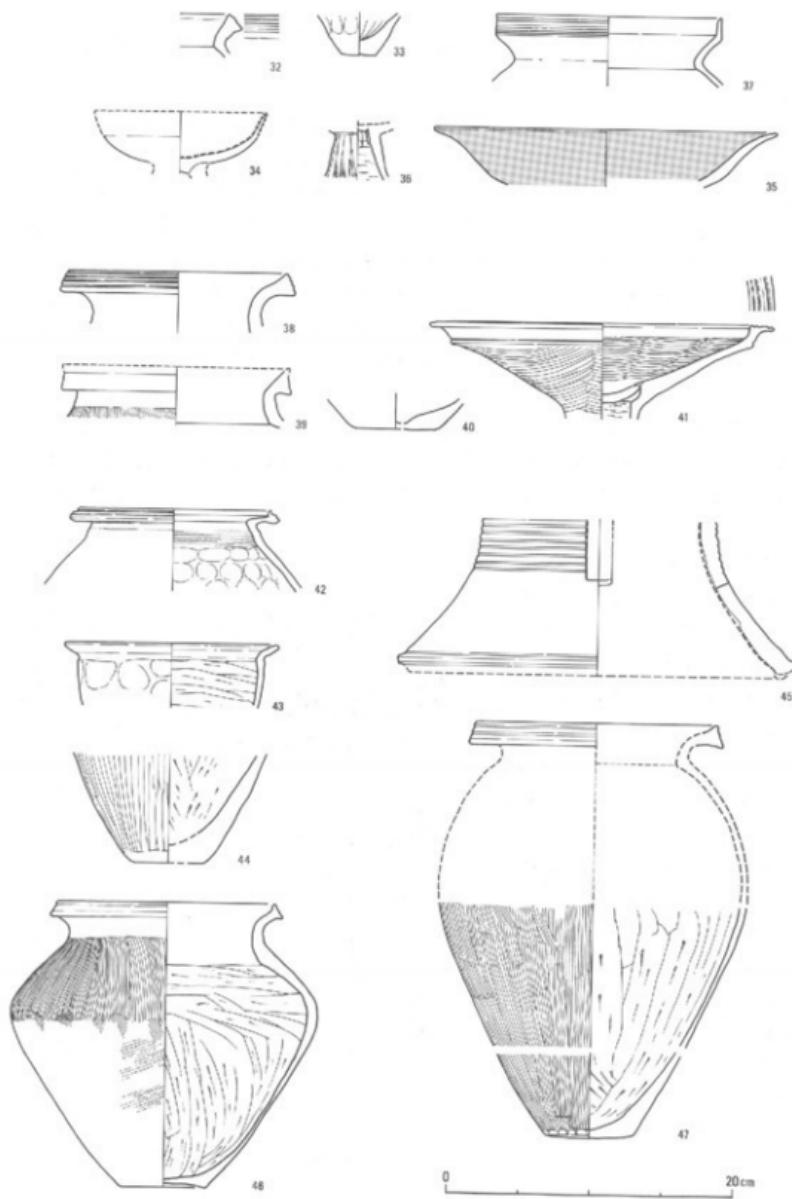


Fig. 17 土器実測図 2

縮尺 1 : 5

る。器台形土器のうち21はA類、22はB類に属する。21の口縁部外面には柳描き波状文を施す。これらの土器は、いずれも弥生時代後期終末と考えられる。

SH 0 3 出土土器 (Fig.16,17) は高环形土器の脚台部である。長めの柱状の脚部から水平にちかく削がのびるもので、薄手のつくりである。古墳時代初頭。

SH 0 4 出土土器 (Fig.17,32-35) のうち、37だけが床面から出土したもので、あとはいずれも埋土中から出土した。埋土出土土器には甕形土器 (32)、鉢形土器 (33)、高环形土器 (34-36) がある。32が後期初頭に属し、他は床面出土の甕形土器とともに、ほぼ同一時期に属すると考えられる。37は短く立ち上がる口縁部外面に柳描き並行沈線を施した、岡山県南部にみられる甕形土器に最も類似する。亀川上層式にやや先行する時期を考えている。後期終末。

SH 0 6 b 出土土器 (Fig.17,39・40) の甕形土器 (39) は口縁部を肥厚させたもので、外面は無文である。後期中葉。

SH 1 4 出土土器 (Fig.17,38・41) には壺形土器の口縁部 (38) と高环形土器の坏部 (41) とがある。壺形土器は短頸のもので、肥厚させた口縁部に凹線文を施せる。高环形土器の口縁部は屈曲して上方に短く立ち上がり、水平方向に拡張した上面に凹線文を施す。後期初頭。

SB 0 1 に付属した段状部から器台形土器 (45) が出土している。脚部にはヘラ描き沈線文を施し、長方形透しを周囲に配する。後期中葉。

42は近世建物 SB 0 9 の柱穴から出土した甕形土器で、弥生中期後葉。

SB 0 6 の上方溝からは、土器細片が出土した。43はそのうち、実測可能な1点で、鉢形土器である。内面をヘラ削りした後、丁寧にヘラ磨きする。後期後葉か。44は SB 0 4 の東方の柱穴から出土した甕形土器の底部である。

SB 0 7 から2点の甕形土器 (46・47) が出土した。46は脚部が張り出し、鉢形土器に近い形態をもつが、器表には炭化物の付着が認められ煮沸の痕跡がうかがえる。後期中葉。

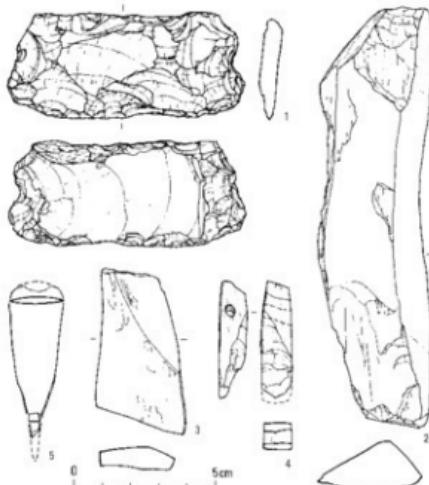


Fig.18 石製品・鉄製品実測図

縮尺1:2

SB 0 9 出土土器 (Fig. 19, 48-51) は土師器皿 (48)、唐津焼碗 (49)、備前焼擂鉢 (50)、勝間田焼壺 (51) がある。唐津焼碗は、薄いオリーブ色の青磁風の釉薬をかけたもので、一部に鉄錆の付着がみられる。断口は灰白色だが、釉薬のかからない器表はやや赤身を帯びる。17世紀初頭と考えられる。備前焼擂鉢は口縁部と底部を欠いた破片で、備前焼特有の暗赤褐色の緻密な焼成である。内面には9条前後を単位とする荒い櫛目が間隔をおいて最初に垂直方向に、ついで斜め方向に施されている。立ち上がった口縁部には2条以上の荒い凹線がみられる。16世紀後半頃と思われる。勝間田焼壺の表面は格子目叩きによる成形後、一部に刷毛目調整を加え、内面は横ナデ調整している。器表は暗灰色、断口はセピア色に硬く焼けてしまっている。従来、この種の勝間田焼の年代については、13世紀頃までと考えられてきたが、この資料によつて終末の時期が下る可能性もでてきた。52は遺構から遊離してB4区から出土した須恵器長頸壺で、平安時代。

石製品・鉄製品 (Fig. 18, 1-5) 住居址をはじめとする弥生時代の遺構から石庖丁 (1) と砥石 (2-4) そして鉄鎌 (5) が出土した。1・4はSH 0 8 の埋土から、3はSH 0 1 の西側柱穴中から、5はSB 0 6 の溝からそれぞれ出土した。2はSH 0 8 ないしSH 0 9 に伴うと考えられた。このほかに、図示できなかったが1点の砥石がSH 0 4 の南西柱穴から出土している。

石庖丁は、サヌカイトを用いた打製品である。SH 0 8 からは、同時にサヌカイトの「楕形石器」小片とチップを検出したので、本住居で石器製作が行なわれたと考えられる。

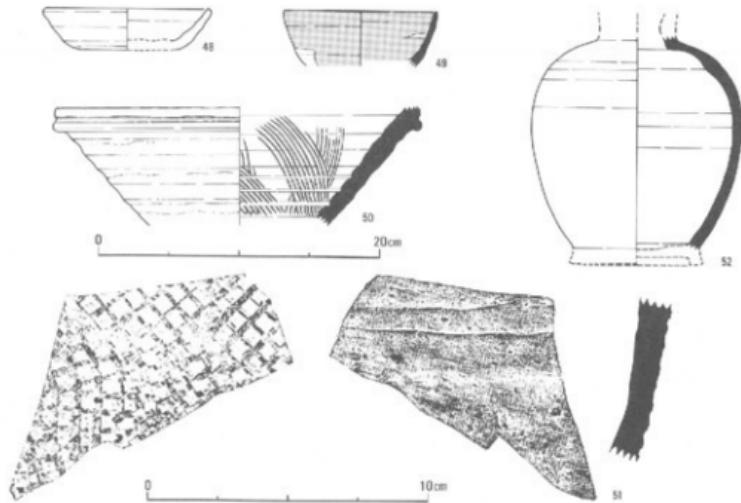


Fig. 19 土器実測図

縮尺 1 : 4, 1 : 2

2 中鎌田墳墓

今回の開発事業区の南西端に位置する丘陵上に存在する。比較的平坦な丘陵頂部から15mほど南西の地点は、急傾斜をなす丘陵斜面との傾斜変換点にあたる。分布調査の段階でここに不自然な高まりを認めた。高まりは、自然の谷に挟まれ南西方向に張り出した突出部となっていたが、周辺地形との境界は明瞭ではない。

土 層 (Fig.21) 試掘調査で丘陵頂部から高まりの中央部まで幅0.8mのトレーナーを設定した (Fig.21、一点鎖線部)。トレーナーの観察では、山側では薄い表土を除くとすぐに第三紀層からなる岩盤が現れるが、トレーナー南西端から2m程の間には表土下に淡黄褐色土層の堆積が認められた。この土層は、地山の第三紀層が風化してできたと思われる均質なもので、たいへん軟らかく、上層中からは須恵器片のほか人骨と思われる小片が数点出土した。

遺 構 (Fig.22) 南北2.5m、東西2mの調査区からは淡黄褐色土層の下底部で須恵器片と骨片が散乱して出土した。本層下面、すなわち基盤上面は不規則な凹凸状を呈し、淡黄褐色土層の堆積に先立つ人為的な加工は認められなかった。また、上層は均質で土坑等の痕跡も認めら

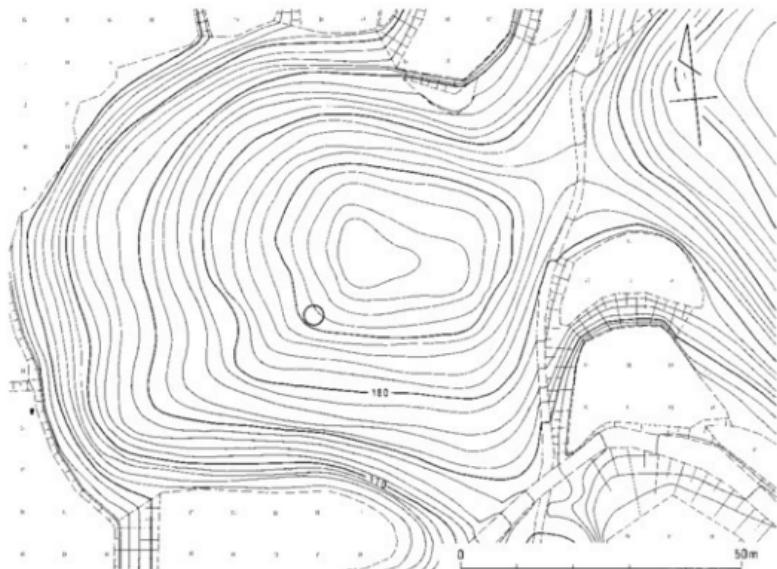


Fig. 20 中鎌田墳墓地形図

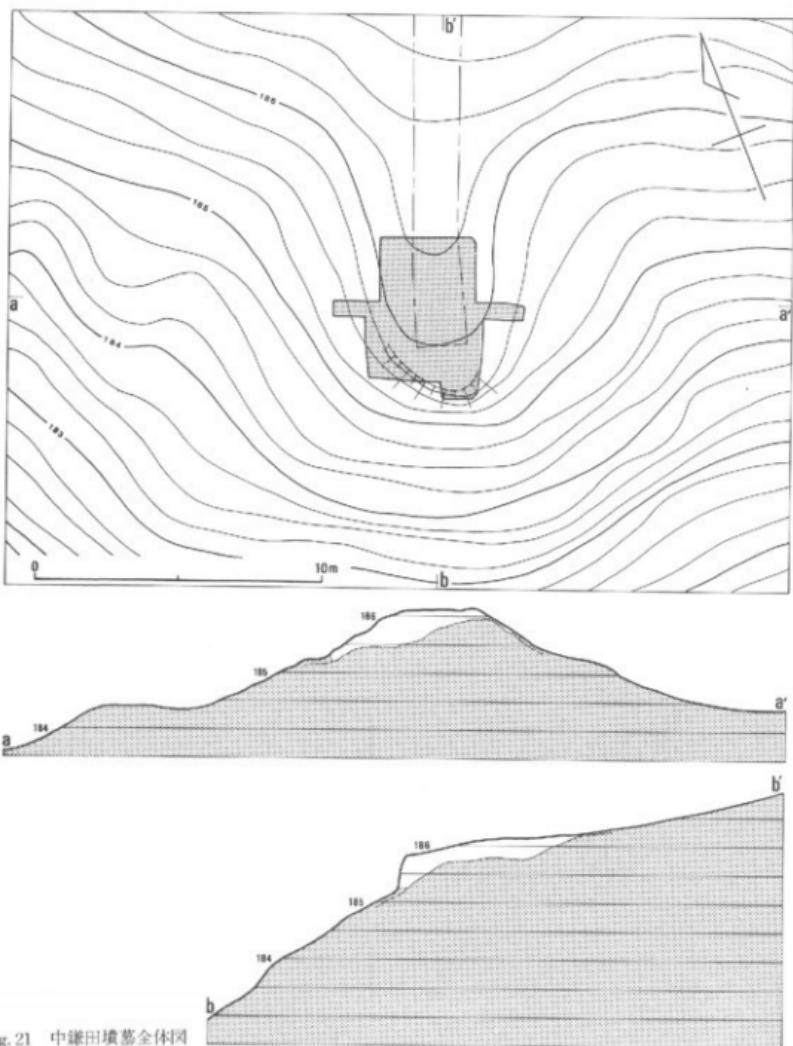
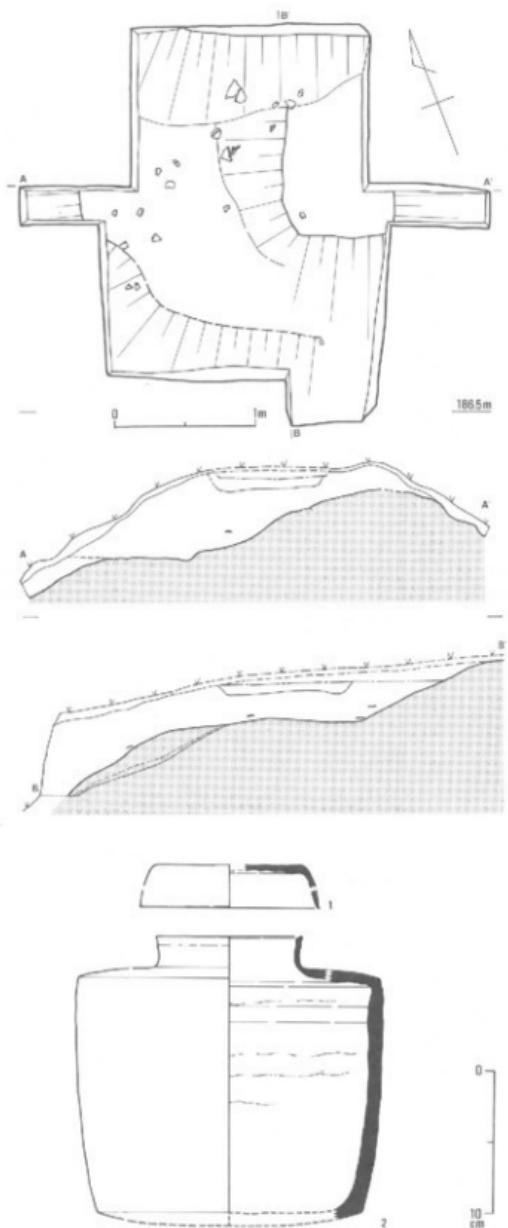


Fig. 21 中鎌田墳墓全図

れない。これらのことから淡黄褐色土層は、擾乱された2次的な堆積であると考えられた。なお、この土層上面には東西0.8m、南北1.0m、深さ15cm程度の落込みが認められた。後世の擾乱坑であろう。



以上のことから、淡黄褐色土層の堆積については人為の盛土であるという確証はつかめなかった。

また、この火葬墓自体の高まりについても、成形の痕跡は認められず、自然地形を利用した可能性が高いと思われる。

遺物 (Fig.23) 出土した須恵器片は、2個の須恵器に復元される。蓋 (1) と蓋 (2) である。

蓋は直径21.5cmを測る筒形の胸部に、直立した口縁部をもつもので、器高20cm。内面および口縁部はヨコナデ調整、外面はナデ調整で底部にヘラ削り成形の痕跡をとどめる。同時に出土した骨片はこの中に納められたものであろう。蓋は水平な天井部をもち、欠失しているが、つまみの痕跡を残す。いずれも、断口はセビア、器表は暗灰色に堅く焼きしめられている。平安時代と推定される。

上段 Fig. 22 遺構実測図

下段 Fig. 23 土器実測図

3 向林遺跡製炭窯の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫・山本恭子

はじめに

地磁気、即ち、地球磁場は偏角、伏角及び地磁気強度の三つの成分で表わすことができる。偏角は磁気コンパスの針の指す北（磁北）が地理的な北（真北）からずれている角度を表わし、伏角は、地球磁場の方向と水平面とのなす角度を示している。これらの二成分で表わされる地磁気は、地球上の各地点で異なっている。一般に、地磁気強度は赤道付近では弱く、緯度が高くなるにつれて強くなり、極付近では赤道の2倍の強さになる。また、赤道付近では地球磁場はほとんど水平なので、伏角は 0° に近い値になり、北に行くにしたがい下に傾く角度、即ち、伏角が大きくなつて、北極付近では 90° になる。南半球では逆に上に傾くので伏角は負の値をとる。偏角は場所によって異なるが、普通、赤道近くでは小さい値であるが、極近くでは非常に大きな値となるので、磁石は、方位を知るための役に立たなくなる。

更に、地磁気は、同一地点でも、時間とともに少しづつ変化しており、長い期間経つとこの変化も積算されて無視できない大きさになることが、昔からの地磁気の観測によって明らかになっている。このような長い期間の変化を地磁気永年変化という。

偏角についての最古の観測記録は中国で8世紀のものが残されており、3°程西偏していたことがわかる。しかし、伏角に関しては16世紀の終わり近くにイギリスのロンドンで行なわれた観測が最初である。ロンドンでは、1580年以来、偏角・伏角両方について継続観測がなされており、400年以上の観測データが蓄積されている。また、地磁気強度については、19世紀になって初めてガウスが測定法を考案したとき以来の記録しかない。これより古い時代に週つての地磁気の永年変化を知ろうとすると、もはや、地磁気の観測記録に頼ることはできないので、他の手段に依らなければならぬ。

土の中には、一般に“砂鉄”とよばれている鉄の酸化物が2~3%含まれている。これは、主に磁鉄鉱(Fe_3O_4)で、磁石になることができる磁性鉱物である。岩石や土の中の磁性鉱物には赤鉄鉱(Fe_2O_3 、ベンガラ)も含まれていることが多い。磁性鉱物は常温では磁石の状態、即ち、磁化をもった状態でいられるが、高温になるとその磁力はだんだんと弱くなり、ある温度を越えると磁化は消失してしまう。この温度をキューリー点といふ。磁鉄鉱のキューリー点は $575^{\circ}C$ 、赤鉄鉱では $670^{\circ}C$ となる。したがって、数百度という高温にまで熱せられるとこれらの磁性鉱物は磁石ではなくくなってしまうのである。逆に、一旦高温になった土が冷えてキューリー点以下になると、再び磁石になる性質をとりもどす。もし、このとき磁場が作用していると、土中に含まれている磁性鉱物は、その磁場の方向に磁化を持つようになり、磁石になる。

この磁北を熱残留磁北という。

地球には地磁気があって、地表のどこの地点でもその磁場（地球磁場）が作用している。したがって、窯や炉などでは、窯体や炉床の土が焼かれて冷える時に、作用している地球磁場の方向の熱残留磁化を獲得する。この熱残留磁化は常温では非常に安定なので何万年たっても変化しない。即ち、焼土は焼成時の地磁気の方向を記憶しているのである。しかし、再びキューリー点以上に熱せられると、先に獲得した熱残留磁化は消え、新たにその後の冷却時に地磁気の方向の残留磁化を獲得するので、何回も使われた窯の場合には最終焼成の火をおとした直後の冷却時に、そのときの地磁気を記録し、それをそのまま現在まで保存していることになる。先にも述べたように、磁気は永年変化をしているので、異なる時代に焼かれた土は、それぞれの時代に特有の残留磁化方向を示すことになり、このように、遺跡に残されている焼土の残留磁化を測定することによって、地磁気観測がまだ行なわれていなかった過去の時代についての地磁気の情報が得られる。年代の良く分かった遺跡焼土の残留磁化を測定することによって、その地域の過去の地磁気永年変化を求めることができる。このような研究を考古地磁気学といいう。過去2000年に関しては、西南日本各地の遺跡焼土の残留磁化測定によって地磁気永年変化の様子が明らかになっている (Hirooka, 1971; 広岡, 1977)。それによると、西暦5世紀前半には磁北は真北と殆ど一致しており、偏角が 0° であったが、その後、西偏が大きくなり6世紀末に 26° に達した後、8世紀始めまでは少し西偏を減じる。その間、伏角は、5世紀末には 45° と浅い伏角を示していたのが、深くなる方向に変化して7世紀中頃に最も深くなり 59° の値を示す。それから伏角は9世紀末まで再び浅くなり 45° となる。7世紀は過去2000年の間でも最も西偏が大きく、また伏角の深い時代にあたる。この永年変化曲線を用いると、逆に年代のわからない遺跡の焼土の残留磁化方向から年代を推定することができる。これを考古地磁気年代推定法という。

試料の採取と測定

考古磁気測定は、窯のなかで焼土がどのような方向に磁化しているかを調べるものであるから、その測定試料が窯体内でどのような方位をとっていたかがわかる定方位サンプルでなければならない。

定方位試料の採取は、先ず、窯床でよく焼かれていると思われる部分を選び、試料とする焼土の部分のまわりに深さ数cmの溝を作ることからはじまる。床面でサンプリングを行なうのは、最終焼成後の変位が最も少ないからである。窯壁の方がよく焼けていて強い熱残留磁化を持っているのだが、窯廃絶後の埋積中に内側に倒れ込んで、昔の地磁気の方向の記録にならない場合が多いからである。次いで、試料とする部分に、水を多めにしてうすくといた石膏をかけて固定し、石膏をかけた部分の上面に、更に、こくといた石膏をのせ、アルミ板を押しつけて平面をつくる。石膏が固化するのを待ってアルミ板をはがし、考古磁気試料採取用に改造

した特製クリノメーターを用いて、石膏平面の最大傾斜線の方位とその傾斜角を測定する。方位を示すマークを、石膏平面にマジック・インキで記したのち、試料として石膏で固めた焼土を窯跡から掘りおこす。試料の裏側にも石膏をつけて補強し、研究室に持ち帰る。

こうして得られた試料は、マークをつけた平面を基準にしてダイヤモンド・カッターを用いて一辺34mmの立方体に整形する。切った面にもくずれないように石膏をつけて補強する。測定試料の熱残留磁化方向の測定は無定位磁力計を用いて行なう。

今回の向林遺跡製炭窯では、窯の床面から17個（試料番号NO-41～57）の焼土試料を採取した。

良く焼けた試料の磁化強度は、焼けの悪いものに比べて大きく測定しやすいが、それでも試料の磁化は地球磁場の強さの100分の1から1万分の1位しかない。したがって、非常に感度の高い磁力計でなければ測定は難しく、地球磁場の乱れが測定に大きく影響する。そのために、人工的な磁気擾乱の少ない深夜（午前1時～3時）にしか測定できない場合が多い。

試料の方位測定にはクリノメーターの磁針を用いているので、遺跡現場の磁北と真北のずれ、即ち、現在の偏角の分だけ測定方位がずれることになる。そのために、今回は製炭窯の横の地点でトランシットによる太陽の方位測定を行ない、現在の偏角を求めた。太陽は天球上を時々刻々動いているが、その方位は、その地点の緯度、経度と時刻が与えられると計算によって求めることができる。求められた方位は真北を基準にした地理学的な方位である。一方、遺跡現場でトランシットの磁針の指す北を基準にして測った太陽の方位は磁北からの角度を与える。したがって、計算値と観測値の差が遺跡現場の現在の偏角となる。こうして西偏7.82°の値を得た。この値を用いて試料の方位を真北に基準にした方位に補正している。

測定結果

向林遺跡製炭窯から得た試料の、側々の磁化測定の結果は第1表に示されている。3個の試料（NO-52, 54, 56）の磁化方向はともに同じ窯跡の他のものと非常に離れた方向に磁化していることがわかる。これは磁化後になんらかの理由で焼土が動いたか、天井や窓壁の焼土が床に落ち込んだか、あるいはその部分だけ温度が上がり充分な熱残留磁化を獲得していないかったか、などが原因でこのようになったと考えられる。しかし、磁化強度を見ると、他の試料と変わらないので、熱残留磁化を獲得するに充分な温度にまで上がっていることを示している。したがって、焼けた後に上が動いたか、他から焼上がまぎれこんだかのどちらかであろう。いずれにしても、正確な過去の地磁気の方向を示しているとは思われないので、これらの試料の測定値は、製炭窯の平均磁化方向の計算の際には省いてある。表註に*印が付いているのが、これら平均磁化方向の統計計算から除外された試料であることを示している。

フィシャーの統計法（Fisher, 1953）による統計計算で得られた平均偏角、平均伏角、平均磁化強度は第2表の通りである。同表には、フィシャーの95パーセントの信頼角（ α^{95} ）、精

度パラメータ (K) も示されている。 α^{95} は小さい程測定誤差の小さいことを意味しており、Kは大きい値を示すほどその遺構の磁化方向のまとまりの良いことを表わす。通常の良く焼かれた須恵器では α^{95} は 1 ~ 3°、Kは数値の値となる。今回の測定結果の磁化方向のまとまりが非常によいことが α^{95} やKの値によってわかる。

考古地磁気推定年代

西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線（広岡、1977）に今回の測定結果を記入したのが Fig. 1 である。曲線上の二重丸が100年毎の一重丸がその間の50年毎の地磁気の方向を表わしている。黒丸が、向林遺跡裂岩窓の考古地磁気測定結果を示しており、それを囲む円はフィシャーの信頼角 (α^{95}) の範囲を示す。

考古地磁気推定年代は黒丸に最も近い永年変化曲線の部分の年代によって与えられる。 α^{95} の円内に含まれる永年変化曲線部分の長さが推定年代の年代幅を与える。

今回の測定結果を地磁気永年変化曲線に記入した Fig. 1 から得られる考古地磁気推定年代は

A.D. 650 ± 20 年

となる。

引用文献

- R. A. Fisher (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.
K. Hirooka (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan,
Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207
広岡公夫 (1977) 考古地磁気及び第四紀古磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol. 15, 200-203

試料番号	偏角(°E)	伏角(°)	磁化強度 ($\times 10^{-3}$ emu/gr)
No.-41	-15.51	59.76	1.19
42	-16.69	57.17	0.94
43	-16.54	58.14	1.09
44	-11.39	57.12	1.02
45	-9.27	59.05	1.55
46	-15.18	61.80	1.38
47	-7.46	55.01	1.92
48	-12.67	57.72	1.45
49	-15.76	59.39	2.05
50	-16.46	61.70	0.76
51	-9.30	61.13	0.72
*	52	4.10	68.58
	53	-14.36	58.51
*	54	-15.98	45.12
	55	-17.30	61.65
*	56	177.39	50.71
	57	-17.99	56.05
			1.88

* : 平均磁化方向を求める統計計算の際に除外したもの
Tab.1 向林製炭窯の磁化測定結果

窯名	N	平均偏角 (°E)	平均伏角 (°)	α_{95} (°)	K	磁化強度 (e.m.u./g)
製炭窯	14	-13.96	58.87	1.35	864	1.75×10^{-3}

N : 試料個数、 α_{95} : フィシャーの信頼角、K : フィシャーの精度パラメータ
Tab.2 向林遺跡製炭窯の考古地磁気測定結果

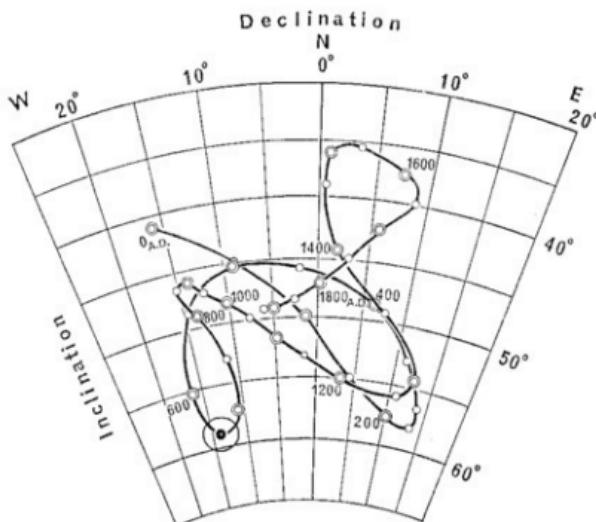
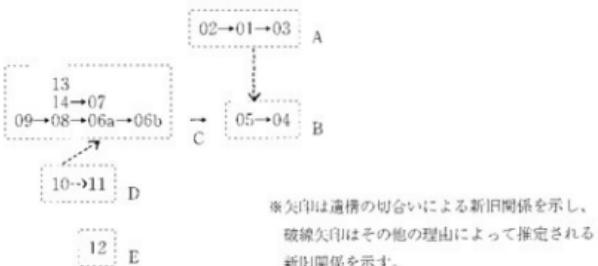


Fig.24 向林遺跡製炭窯の考古地磁気測定結果と西南日本の地磁気年変化

III まとめ

ここでは、今回の発掘調査によってあきらかとなつた事実のうち、遺跡の土体をなす弥生—古墳時代集落と製炭窯の特徴的なことがらについてまとめ、問題点を指摘したい。

弥生・古墳集落の変遷 向林遺跡で検出された住居址群は合計15棟を数える。これらは重なり合いをみせながら集中するが、AからEまでの5つのグループに分けることが可能である。AグループはSH 01～03の3棟、BグループはSH 04・05の2棟、CグループはSH 06a～09・13・14の7棟、DグループはSH 10・11の2棟、そしてEグループはSH 12の1棟からなる。グループ内外の住居址の新旧関係についてまとめればつぎのようになる。



このように、B、C、Dのグループ間には遺構の切り合い関係が認められるが、A、Eと他のグループとの間には直接の切り合いは認められない。C、Bにみられる切り合い関係は、最低で6期の存在を示しているが、いっぽうB、C、Dのグループはたがいに重複しているため、直接の切り合い関係のあるなしにかかわらずこれらのグループ内において住居の同時存在はありえない。したがって、B、C、Dグループにおいては住居総数は、住居の拡張回数を一部含みつつも、建て替えの回数には等しいとみると、11期を数える。

A、Bグループは南北に並び、一見すると同時存在したかに見える。ただし、両者の距離はSH 01とSH 05で1.9mを測るにすぎず、住居を掘削した際の堆土を積み上げたと考えられる住居外方の堤などを想定した場合、両者の同時存在は不可能である。また、SH 01の埋土中には、基盤層を掘り込んだ際のものと考えられるブロックからなる特徴的な土層があり、これはBグループに接する部分にだけ認められた(Fig.5)。このことは、SH 01が廃絶し、ある程度埋まつた後に、SH 04あるいは05が隣接して建てられたことを示している。したがって、B、C、DグループとAグループとは併存せず、住居の建て替え回数は14回に近いものとなる。

これらの住居址から出土した土器のなかで最も古く位置づけられるのはFig.17, 38, 41に示し

たもので、後期初頭に属する。また、最も新しく考えられるのはFig.16,17の高环形土器で、古墳時代初頭である。土器の出土量は全体的に少なく、途中に欠落する型式も存在するが、こうした建て替えの状況からみて、住居群は後期全体を通じて形成された可能性がある。以上のことから調査区内においては、複数住居の同時存在の可能性は積極的には認められず、むしろ単独の住居が位置を変更せずに同一場所で繰り返し建て替えられた変遷をしめしている。

このような住居の継続は、本地域ではこれまで弥生時代後期～古墳時代初頭にかけてかなり認められている。津市山人山十二社遺跡では4、13、14号住居などてたんなる拡張とはことなる重複した建て替えがみられる（中山編、1981）。津市山京免遺跡では後期に属する環濠内の住居密集度は、遺構の近接度合からみて比較的高かったと推定されるが、それでも同時併存のありえない住居の重複が顕著である（中山、1982）。これにたいし、比較的調査例の多い中期後半の集落遺跡では住居の拡張は後期と同様、一般に認められる反面、住居の重複する建て替えは後期の例ほど著しくない。これは、集落の存続期間の長短といった時間的な原因だけによるものではなく、集落の継続のあり方自体に中期との間に差異があったのではないかと考えられる。

弥生土器・土師器 本遺跡出土の弥生土器については、出土したのが小破片に限られ、純量も少ないとから、所属するおおまかな相対時期を個々に記してきたにすぎないが、ここで本地域における後期弥生土器の編年案（中山編、1981）との対比をおこなってまとめておく。

弥生後期初頭とした土器（Fig.17,32-38-41）は、いざれも四線文の発達したもので中期的な様相をとどめる。大田十二社第1式（以下、大田*式と略称）にあたる。前葉とした上器（Fig.16,1-2）は四線文をもたず、口縁部の拡張も著しくないので、大田1式の後半ないしは大田1・2式の中間にあたると考えられる。中葉とした上器（Fig.17,39-45-47）には口縁部に四線文をかすかにとどめるもの（46-47）と、無文でやや立ち上がりをみせるもの（39）とがある。前者は大田2式前半に、後者は大田2式に位置すると思われる。45は胴部にヘラ搔き沈線文を施したもので大田2式に対比される。大田3・4式に並行すると考えられる明確な資料は存在しない。後期終末期とした土器群の内、SH 01床面出土の土器（Fig.16,18-31）とSH 04出土の一品（Fig.17,33-35）には、あるいは時期差が認められ、後者が後行する可能性もあるが、ここではおおきく大田5式並行ととらえておきたい。古墳時代初頭とした土器（Fig.16,11-13-17）は量的に少なく、その内容については不明な点が多いが、大田5式並行とした後期終末に統く時期を想定している。

大田5式並行とした弥生後期終末の上器群のなかに存在する器台形土器Aについてふれておく。この形式の器台は本地域においては、大田十二社遺跡の調査で初めて2点が認識され、胎土の特徴とあわせ、但馬地方からの搬入品とされたものである。これらは大田4期に属する。

本遺跡でも2点の器台Aが出土した。そのうちSH01床面出土品(Fig.16.21)は、前述したとおり大田5期に属すると考えられる。本遺跡では、明瞭な胎土の特徴を認めることができないので、これらをただちに搬入品とはできない。その前後の発掘諸調査によって、大田十二社遺跡および本遺跡以外にも津山市二宮遺跡(高畠知功他、1978)、同上部遺跡(註1)で同形式の器台が発見され、津山盆地地域における器台Aの存在は偶發的なものではないことを示している。

このように、この器台Aの存在が示す但馬・丹後を中心とした近畿西北部との関係(註2)については、後期の大田4・5式の段階になって、「コミュニケーションの範囲」(中山、1987)が広がったことを示すにとどまらない。本土器形式の山陰、山陽側への流入状況と対比すれば、津山盆地と両地域との間にきわだった差異を指摘することができる。すなわち、津山盆地の北方、日本海側では、伯耆・因幡においては器台Bが盛行するが、Aはまったく流入しないよう、器台Aに対する拒絶性が認められる。いっぽう、津山盆地の南方、備前・備中でも少量の器台形土器Bが認められるのに対し、器台Aは発見されていない。津山盆地地域における弥生後期遺跡の調査例にくらべ、比較にならないほど多量の資料が得られている両地方にみられるこうした現状は、当時の姿をほぼ反映したものと評価される。中国地方の中央部付近、津山盆地の位置する一帯に器台形土器Aにみられる東方からの十器型式の貫入が認められるわけだが、このことはこの段階における他地域土器の受容に関する美作の独自性(中山、1987)を示すものと評価できるのである(註3)。

器台Aの西方への分布にみられる跛行性に対し、日本海側を中心とする器台Bの拡散は対照的である。津山盆地では、後期後葉の遺跡から普遍的に見いだされるほか、岡山県南部においても器台Bの存在は珍しいものではない。また、特徴的なことは、器台Aの中心的な分布域とみられる但馬・丹後地方にも器台Bは広範に分布するようで、たとえば京都府橋爪遺跡において器台A・B両者の併存が認められる(註4)。このことは、後期中葉ないし後半に成立する日本海側における九重式をはじめとする上器様式群、瀬戸内側における上東式をはじめとする様式群の示す強烈な個性の存在と、土器様式の背後に存在する地域集団間の関わりあいかたを一面において示すものである。このようにみれば、美作地方にみられる「独自性」とは、地域集団としての強い個性の欠落、そしておそらくは政治権力の相対的な未発達を示すものではないかと思われる。

上記のように、おおきく同形式に属する器台形土器を取り上げてみても、その流入と受容のあり方には細分形式別の違いのあることが認められた。こうした検出作業の遅れている本地域にあっては、いわゆる「搬入土器」の検討・評価にあたって、個々の形式あるいは型式別にその実態を細かく認識していく努力が必要であると考えられる。

製炭窯 本遺跡で検出した製炭窯については、後世の削半によっておおきく破壊されていた。かろうじて残存した遺構から読みとれる諸事実は、これまでに発見された同種製炭窯の知見を越えるものではなかった。本製炭窯にともなう遺物は発見されず、考古学的な所属年代についての手がかりはない。ただし、今回の調査では富山大学広岡公夫氏のご尽力をいただき、A.D.650±20年という考古磁気推定年代を得ることができた。得られた年代について、これまでの発見例と対比し、どのように評価できるのかについて考えてみよう。

これまでに岡山県内で発見された横口式製炭窯は、合計17遺跡、総数48基をかぞえる。このうち、型式学等の考古学的方法による推定年代の知られるもの6遺跡例、考古磁気推定年代の公表されているものは本遺跡を含めると3遺跡がある。前者のなかで年代が比較的限定できるもの5例では、7世紀代の古墳によって切られたものが4例あり（註5）、製炭窯には6世紀後葉から7世紀中葉までの年代が推定されている。いっぽう、後者は結果の公表されているものが少なく全体の傾向をつかむことは困難だが、7世紀が2例、8世紀が1例あり（註6）、両者の推定年代はほぼ一致する傾向を示しているようである。このことは本遺跡における推定年代の妥当性をものがたるとともに、考古磁気年代推定法の有効性を示すものであろう。

したがって、県下における横口式製炭窯の年代は上限と下限が不明瞭ながら現状では6世紀後葉から7世紀中葉にかけてのはば100年たらずの間に集中するといってよい。これらの横口式製炭窯の形態について細分の可能性も示唆されている（中山、1986）が、その困難さはこうした存続期間の短さにもよるのかもしれない。また、いっぽうで6世紀後葉から7世紀前半に集中する、群集墳への鉄器供獻などに示される鉄生産の盛行は、これまでにも指摘されてきたようにこの種の製炭窯と鉄生産との関係をものがたるものであろう。

註1 昭和63年に津山市教育委員会が発掘調査を実施。

註2 もっとも、近畿地方の器台Aの分布をみれば、但馬・丹波方面から直接もたらされたのではないと考えられる。すなわち、播磨西部の丁・播ヶ瀬遺跡、本位田遺跡でも同形式の器台が出土しており、このことから播磨を経由して津山にいたる経路が復元できる。

註3 器台形土器の分布については、埋蔵文化財研究会編、1985によった。

註4 註2に同じ。

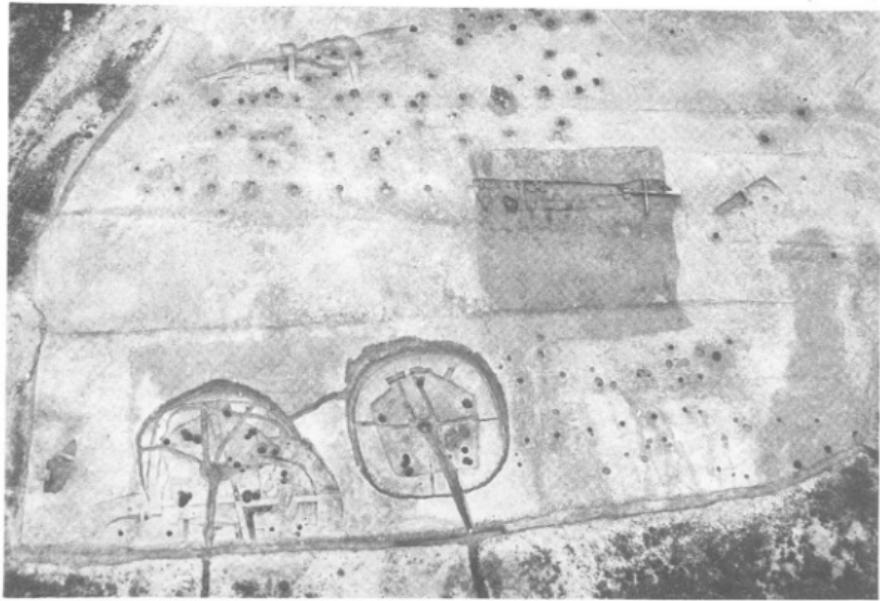
註5 考古学的方法による横口式製炭窯の年代推定例はつぎのとおり。津山市綠山遺跡：6世紀後葉～7世紀前半（上器年代による。中山、1986）、同鮎込遺跡：6世紀後葉～7世紀前葉（7世紀後半と7世紀前半の古墳に先行。報文未刊）、總社市長砂谷製鉄窯遺跡：7世紀中葉以前（7世紀中葉の古墳に先行。村上幸雄、1988）、同久代第2団地遺跡群：7世紀前半以前（7世紀前半の古墳に先行。村上、1988）、同青谷川2号墳間連遺構：7世紀初頭以前（7世紀初頭の古墳に先行。村上、1988、および村上氏の教示による。）

註6 考古磁気年代推定法による推定例は本遺跡例の他につぎのとおり。津山市金井別所遺跡：7世紀（中島正志他、1988）、浅口郡鴨方町和田遺跡：A.D.720±20（時枝克安、1981）

引用文献

- 高畠知功・二宮治夫・葛原克人（1978）二宮遺跡、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28、p.96、
岡山県教育委員会
- 時枝克安（1981）熱残留磁気による古窯跡の年代決定、伊藤　晃・浅倉秀昭・江見正己
　　山陽自動車道建設に伴う発掘調査2、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42、
　　岡山県教育委員会
- 中山俊紀編（1981）大田川十二社遺跡、津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集、
　　津山市教育委員会
- 中山俊紀（1982）京免・竹ノ下遺跡、津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集、
　　津山市教育委員会
- 埋蔵文化財研究会編（1985）第18回埋蔵文化財研究会　弥生時代後期から古墳時代初頭のい
　わゆる山陰系土器について（資料）
- 中山俊紀（1986）緑山遺跡、津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集、P.78、
　　津山市教育委員会
- 中山俊紀（1987）津山盆地の弥生時代、近藤義郎・河本　清編　吉備の考古学、P.220・221、
　　福武書店
- 中島正志・夏原信義・渋谷秀敏・川井直人（1988）金井別所遺跡の熱残留磁化による年代推定、
　　行田裕美編　金井別所遺跡、津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集、
　　津山市教育委員会
- 村上幸雄（1988）長砂谷1号墳・長砂谷製鉄関連遺跡、総社市埋蔵文化財発掘調査報告 6、
　　総社市教育委員会

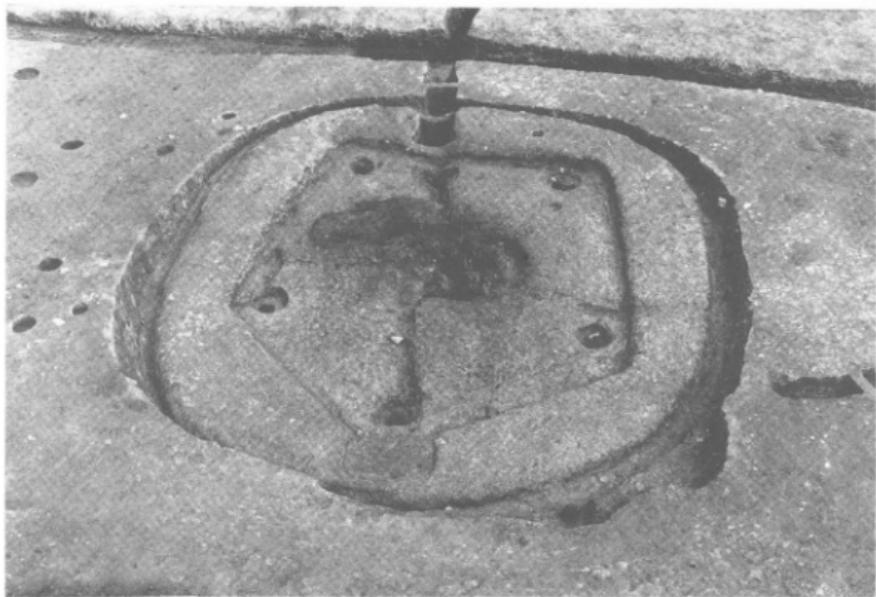
図 版



向林遺跡航空写真



弥生～古墳時代住居址（A・B・C・Dグループ）



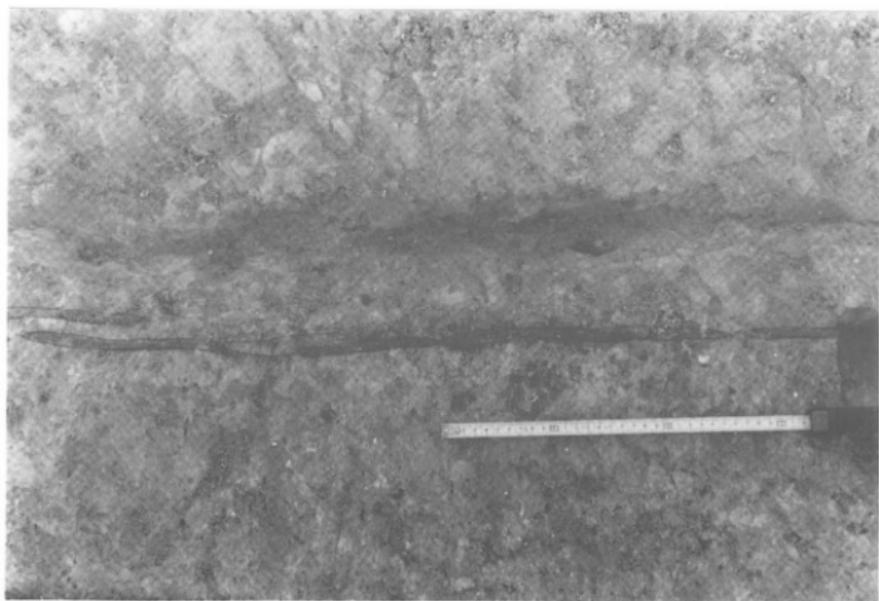
SB01・03 (西から)



SB04・05 (北西から)



SH01・02南側ベット状遺構（東から）



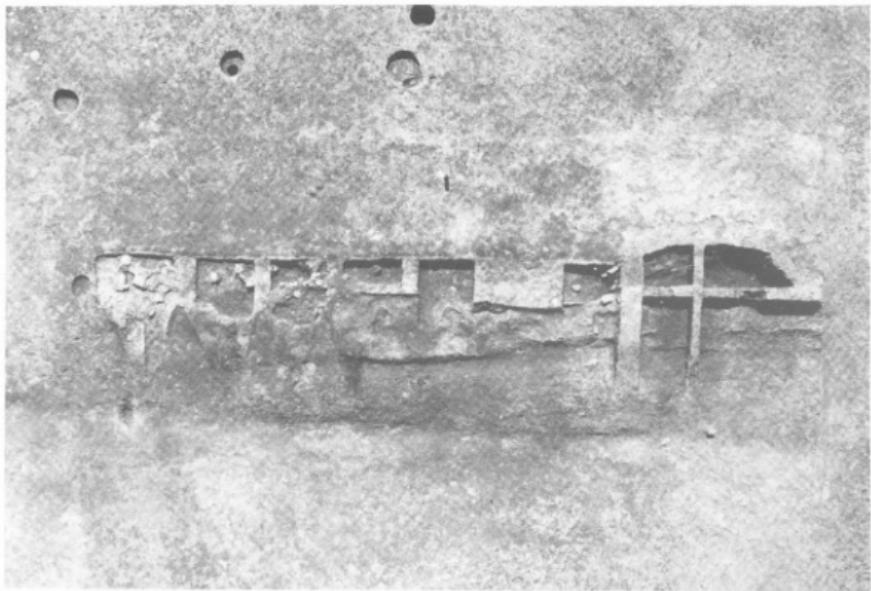
SH02ベット状遺構矢板痕



SH02ベット状遺構矢板痕（西から）



SH12（北から）



製炭窯全景（上空から）



製炭窯（北から）



46

SB07出土弥生土器



4

41

18

弥生土器（41：SH14床面、18：SH01床面）、土師器（4：SH01埋土）



SB09



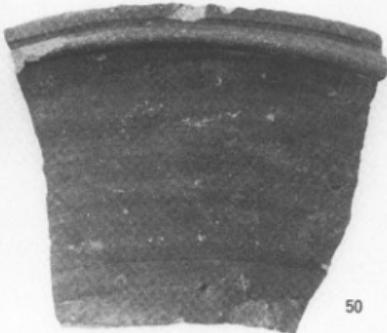
49



48

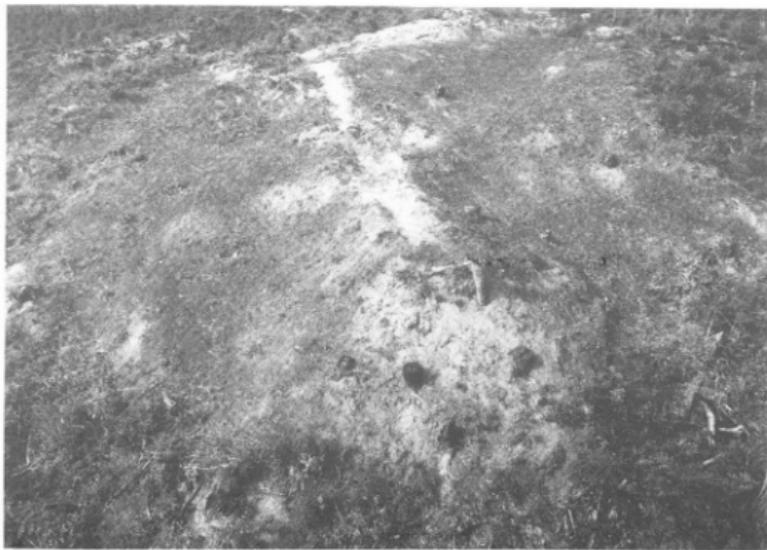


51

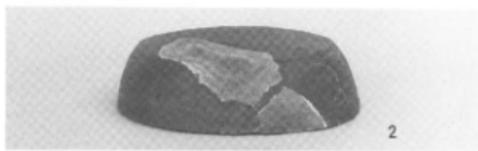


50

SB09出土土器 (48：土師器皿、49：唐津燒碗、50：備前燒捲鉢、51：勝間田燒甕)



全景（南西から）



出土骨蔵器

向林遺跡・中鎌田墳墓

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第29集

1989年7月31日発行

編集・発行 津山市教育委員会
大塩農地造成埋蔵文化財発掘調査委員会
岡山県津山市山北520